

成人学習者の学習を支えるポートフォリオ評価の試み

松井玲子・西山恵子

〔キーワード〕 ポートフォリオ、『まるごと 日本のことばと文化』、成人学習者、コースデザイン、教材開発

〔要旨〕

国際交流基金シドニー日本文化センターは、『まるごと 日本のことばと文化』を主教材として使用した成人学習者対象の日本語講座にポートフォリオ評価を導入して2年目となる。1年目の実践を通して、ポートフォリオ評価に消極的な受講生の存在や、全体的に学期が進むにつれてモチベーションが低下していく傾向も見受けられた。このような課題を踏まえ、評価ツールとしてのポートフォリオの改善を試みた。

本稿では、新たに開発したポートフォリオの各構成物の概要、それをを用いた評価活動の実践、そしてその成果について報告する。ポートフォリオと教室活動を連携させたコースデザインを試みた結果、受講生の評価活動の参加度や学習が促進される様子が観察された。ポートフォリオ評価は成人学習者の学習を支援するために有効的なツールであるという可能性が示唆された。

1. はじめに

国際交流基金シドニー日本文化センター（以下、JFSY）では、一般成人学習者向けに運営しているJF講座の入門コースで、2013年1月よりJF日本語教育スタンダード（以下、JFスタンダード）準拠のコースブック『まるごと 日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）⁽¹⁾を主教材として使用を開始した。同時に、学習者の自律的な学習と学習の自己管理を促進するツールとしてポートフォリオ（以下、PF）評価も導入した。

受講生はコース期間を通じて、自分の学習過程を記録するために、評価表、言語的・文化的体験の記録、学習の成果物をPFに収めていった。そしてPFを活用して、コースの中で自己評価、学習の振り返り、体験の記録をもとにした話し合いなどの評価活動を行った。

受講生はPFを使った評価活動を初めて経験する者も多かったが、概ね好意的に受け入れていた。特にコース前半には、教室外で行った体験を積極的に記録する様子が観察された。松井他（2014）で報告したように、1年間に渡る実践の結果、受講生がこうしたPF評価活動の意義を理解し、自己評価が習慣化する、教室外の自律的学習が促進されるなどの成果が見られた。しかし、その一方で、PF評価活動に対して消極的なままの受講生もおり、積極的にPFを活用

していた受講生も、コースが進むにつれて次第にモチベーションが低下する傾向も見られるようになった。このような課題を踏まえ、2014年度コースで改善を試みた。本稿ではその取り組みについて報告する。

2. 開発の経緯

2.1 2013年度の取り組み

2.1.1 コースの概要

本実践の対象となっているのは入門A 1レベルに該当する Starter コースで、『まるごと』の活動編と理解編を併用する総合コースである。4学期制の通年コースで、1学期は10週間、授業は週1回、2時間、コースの総時間は80時間である。JFSY のコース修了要件は出席率のみで、PF 自体を成績を出すための評価対象にはしていない。

受講生は10代後半から70代までの一般成人学習者で、主な受講動機は趣味や日本文化への関心、日本人配偶者がいるからなどである。2013年度コースの開始時には、3つのクラスに計42名が在籍していた。

2.1.2 ポートフォリオの概要

JFSY の PF は JF スタンダード (国際交流基金 2009、2010) が推奨する3部構成に基づき作成し、以下の構成物²⁾をA 4ファイルに収めた。

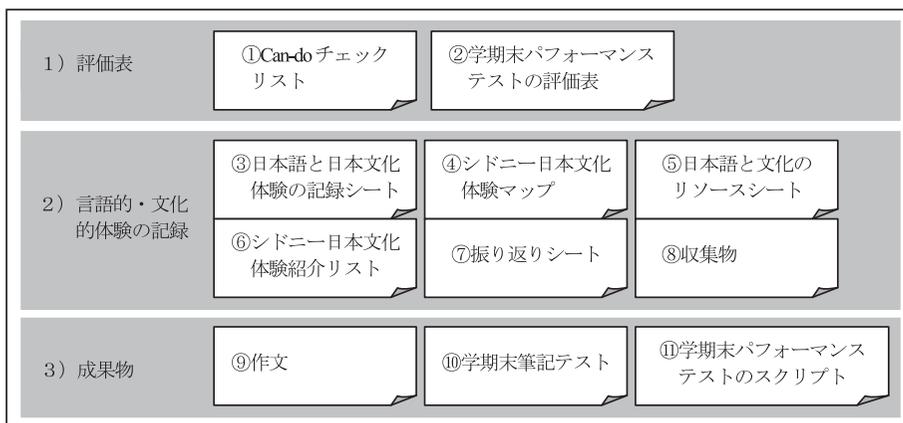


図1 2013年度ポートフォリオの構成

コースでは、予め①、③、④、⑤、⑥を入れたPFをオリエンテーション(以下、オリエン)で受講生に配布し、JFスタンダードの概要と合わせてPFの意義と使い方を説明した。具体的には、まず①を概観し、学期中の学習項目と内容を教師と受講生で確認後、毎回の授業後にその日の学習成果を3段階で自己評価し記入するよう指示した。そして、教室外で文化や言語学習に関する体験をするように促し、その体験内容を③、④、⑤に記録するように指示した。③にはコース中に行った体験を時系列に記録し、付属してPFに入れた物があれば(⑧)それも記述し、シドニー市内と近郊の地図を使った④には体験した内容と場所を記録させるようにした。⑤は『まるごと』の課毎に参考となるオンラインリソースを紹介したものであるが、他に受講生が見つけた学習に役立つリソースの情報も書き留めるよう指示した。学期末には各受講生がその学期の自分の学習を振り返り、今後の学習計画を立てる時間を持ち、⑦に記述させた。また、学期の総括評価として行うパフォーマンスタスクの学習成果である②、⑩、⑪もファイルするよう指示した。

学期の中間と期末に設けた振り返りの時間の中でもPFをクラスメートに見せながら、情報共有するための話し合いを行った。学期の終了時に教師はPFを回収し、利用状況と収集物の内容をチェックして返却した。

2.2 課題

前述の通り、PF評価に積極的に取り組む受講生が多い中、依然として参加しない受講生もいた。また、コースが進むにつれ、コース開始時には積極的にPFを活用していた受講生の参加度が徐々に停滞していく様子が観察され、特にPFの「体験」の記録が減少していった。クラスの振り返りの時間に設けた話し合いの中でも発言する受講生に限られるようになり、発言する内容も「体験をした」という紹介に留まってしまうことが多くなってきた。

また、学期末の振り返りに⑦で立てた「目標」を見ても、「日本が上手になりたい」など、学期中に実現するのが難しい、達成したかどうか判別しにくい漠然とした記述が目についた。受講生はそれぞれの構成物の目的や意義が見出せなくなっているようで、PF評価活動に対してのモチベーションが下がってきているように感じた。

このような現象の要因として、まず構成物の書式の数が多く、記述をすること自体が受講生の心理的負担になったことが考えられた。そして、受講生の自主性を尊重しようと、あえて書式にレベルや内容に制限となる枠をつけなかったのであるが、反対に受講生にとっては、何を書いたら良いか、具体性を持たせることが難しく、教室外の行動に繋がりにくいのではないかと考えられた。

その一方で、学期末のパフォーマンスタスクの準備のために教師が指示を明確にし、タスクを出した場合は、教室外の体験が積極的に行われたことが観察された。また、教室外ではPF

を使用していない受講生も、PFを使った評価活動を教室の中で授業の一部として行った場合には、PFに記録を残す、目標を立てる、自己評価するなど、PF評価活動に参加していた様子が記述した内容から窺えた。

こうした状況を踏まえて、構成物の内容とPFを活用した評価活動の両面から2014年度に向けてPFの改善を行うことにした。具体的には、構成物を見直し、1) 数を最小限に減らして、内容をシンプルにする、2) 構成物と学習項目に関連性を持たせ、なおかつ何を書くのか、具体的に、そして明確に指示する、3) 教室活動と評価活動を連携させたコースデザインを行う、の3点であった。

3. 2014年の実践

3.1 コースの概要

本実践の対象となる2014年度のコースは内容、スケジュール、クラスサイズ、受講生の特徴共に2.1.1で述べた Starter コースと同様である。実践期間の1学期と2学期それぞれに42名が在籍していた^③。授業は報告者2名とオーストラリア人講師の1名が担当した。なお、2013年度と2014年度共に同じ講師3名が授業を担当し、PFの教材開発も行っている。

3.2 ポートフォリオの内容と評価活動の概要

2014年度のPFの構成と各構成物は図2に示すとおりである。改善点は、1) ① Can-do チェックリストの活用方法の変更、2) ⑦を「学習の計画と振り返りのシート」にし、書式を変更する、3) 2013年度の構成物であった③④⑤を統合し、「日本語と日本文化体験の記録シート」を1枚とする、4) これに関連して新たに教室外の学習を促進する目的でタスクシート「Japanese in Action」を開発する。以下、これら4点について、内容と使用方法の詳細を述べる。

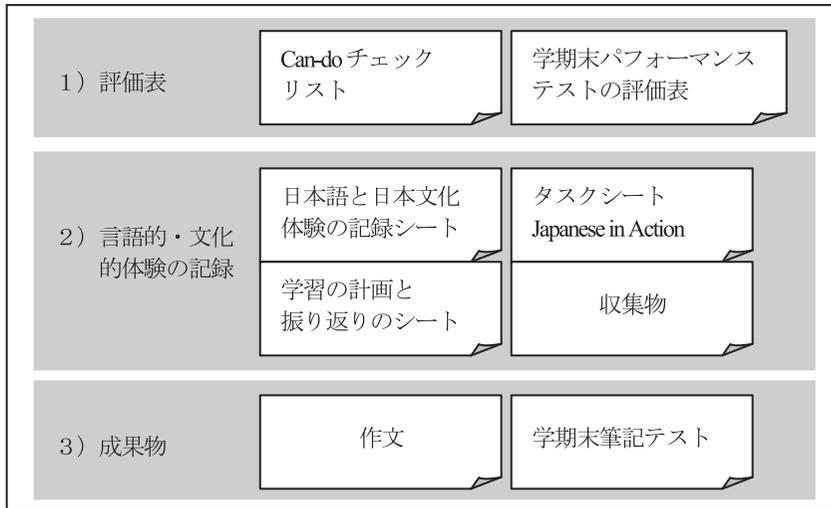


図2 2014年度ポートフォリオの構成

3.2.1 Can-do チェックリスト

図3に見るように、JFSYでは「Can-do チェックリスト」は学期毎の活動編の目標 Can-do と理解編の日本語チェックを A4 用紙 1 枚にまとめて、コースの全体像を概観できるようにしている。教師はこのリストを各学期開始時のオリエンで受講生に配布し、受講者とその学期の学習項目を共有する。それから受講生はリストを見ながら日本語でどのようなことができるようになるかを確認する。

学期	活動編	目標	Can-do	達成度	コメント		
1学期	日本語と日本文化体験	1. Talk about your favorite foods.	★	◎			
		2. Offer someone a drink.	★	◎			
		3. Talk about your breakfast.	★	◎			
		4. Use a calendar to describe days.	★	◎			
		5. Talk with a friend about where to go for lunch.	★	◎			
		6. Read a menu.	★	◎			
		7. Order food and drinks at a hamburger shop.	★	◎			
		8. Ask / say where to put things in the room.	★	◎			
		9. Read a newspaper or news.	★	◎			
		10. Show someone around your home.	★	◎			
2学期	日本語と日本文化体験	1. Give someone an address or signs.	★	◎			
		2. Recognize the name of an address or signs.	★	◎			
		3. The time on your schedule.	★	◎			
		4. Talk about your daily routine.	★	◎			
		3学期	日本語と日本文化体験	1. Read a newspaper or news.	★	◎	
				2. Read a newspaper or news.	★	◎	
				3. Read a newspaper or news.	★	◎	
				4. Read a newspaper or news.	★	◎	
				5. Read a newspaper or news.	★	◎	
				6. Read a newspaper or news.	★	◎	
7. Read a newspaper or news.	★			◎			
8. Read a newspaper or news.	★			◎			
9. Read a newspaper or news.	★			◎			
10. Read a newspaper or news.	★			◎			

図3 Can-do チェックリスト

このリストは2013年度から使用しているが、2014年度からは「学習の計画と振り返りのシート」(3.2.2で後述)を使って学期の学習目標を立てる際に、この Can-do チェックリストを参照するようにした。このシートは2013年度と同様に学期を通して使用し、各授業の開始時にその日の目標をパワーポイントのスライドで提示し、授業終了時に受講生は自己評価し各自のリストに記入する。さらに学期末にもう一度学習の成果を自己評価し、学習の振り返りに活用する。

3.2.2 学習の計画と振り返りのシート

このシートは Can-do チェックリストと連携させて、学期ごとに受講生が具体的な目標を設定し、そして自分の学習を振り返り、評価することを目的に開発したものである。2013年度は学期末に「振り返りのシート」に「日本語で何ができるようになりましたか」「次の目標は何ですか」「その目標達成のために何をしますか」の項目を記述させ、受講生はその学期の学習を振り返り、今後の目標設定を行っていた。2014年度は、学期始めのオリエンの際にその学期中の学習の目標と計画を立てるようにした。

図4に見るように、1ページ目が目標と計画の部分に該当するが、ここは Can-do チェックリストを参照しながら記述する。まず、受講生はレベルの指標として JFSY の Starter コースの通年の目標を確認する。次に Can-do チェックリストの中から特に習得したい Can-do 目標を自分の目標として3つ選び記入する。この段階は受講生にとってより詳細に Can-do チェックリストを見直す機会にもなる。次に受講生は自分の学習目的や生活環境に合わせた目標を立てる。具体的な目標設定を促すために、「何ができるようになりたいですか」「どのように日本語を使ってみたいですか」「日本のどんなことを知りたいですか」との質問文を記載した。そして、その目標達成のために何をするか、学習方法を記述する。このように段階を経て、学習項目から個人の環境へ視野を広げて学期の目標を設定できるようにしている。

(1 ページ目)

Starter Course Term 1, 2014

My Learning Plans and Reflections 名 姓 : _____

Course Goals

1. Can ask and answer simple questions on very familiar topics, such as family and oneself.
2. Can understand and use simple phrases and sentences in areas of immediate need.
3. Can recognise familiar names, words and very basic phrases on simple notices.
4. Can write simple isolated phrases and sentences.

Beginning of Term

1. Choose 3 Can-Do Tests which you would most like to be able to do from the Can-Do Check List.

1. _____ ☆☆☆
 2. _____ ☆☆☆
 3. _____ ☆☆☆

2. Your goal: What do you want to be able to do?
 How do you want to try to use Japanese?
 What do you want to know about Japan?

1. _____ ☆☆☆
 2. _____ ☆☆☆
 3. _____ ☆☆☆

3. What are you doing to achieve the goals set out above?

1. _____
 2. _____
 3. _____

The Japan Foundation, Tokyo J-Global Language Courses

(2 ページ目)

Starter Course Term 1, 2014

End of Term

*Please evaluate your achievement of the goals you set in parts 1 and 2.

1. Were you able to achieve the goals you set?

Yes/No (please circle)
 Why? _____
 What effected the results? _____

2. Please evaluate your Japanese ability:

	Good	Average	Poor
Speaking	_____	_____	_____
Reading	_____	_____	_____
Listening	_____	_____	_____
Writing	_____	_____	_____
Understanding of Japanese Culture	_____	_____	_____

3. What is your next goal?

1. _____
 2. _____
 3. _____

The Japan Foundation, Tokyo J-Global Language Courses

図4 学習の計画と振り返りのシート

成人学習者の学習を支えるポートフォリオ評価の試み

2 ページ目は学期末の振り返りの時間に記述する。受講生はまず目標が達成できたかどうかを振り返り、その結果と自分で分析した要因について記述する。その後、「話す」「読む」「聞く」「書く」「異文化理解」の5つの項目について熟達度の自己評価を行う。最後に次の目標を立て、継続的な学習と自己管理へとつなげていく。

3.2.3 日本語と日本文化体験の記録シート

2014年度は、見やすく、記述しやすいシートにするために、2013年度コースに3種類あった記録シート（③、④、⑤）を1枚に統合した。記録は時系列ではなく、授業内容に関連させながらトピック毎に記述できるように変更した。

Starter Course		Record of Linguistic and Cultural Experiences							授業日:
Topic	Lesson	Can-do	Task	Check	Out of Class Activities	Materials Collected (If applicable)	Date	Comment/ Memo	
たべもの	5	Talk about your favorite foods			Ex. At a party I talked about my favourite Japanese food with the host.		8-May-14		
		Offer someone a drink							
		Talk about your breakfast	Japanese in Action: Draw your breakfast						
			Composition: My Breakfast						
	6	Say what your favorite dish is							
		Talk with a friend about where to go for lunch							
		Read a menu	Japanese in Action: Read a menu at a Japanese restaurant						
		Life and Culture: Fast foods restaurants							
いえ	8	Ask/ Say where to put things in the room							
		Visit/ Welcome a friend							
		Show someone around your home							
		Recognise the name and address on signs							
		Life and Culture: Rooms	Japanese in Action: Design a Japanese room						
せいかつ	9	Say the time you do something							
		Talk about your daily routine	Japanese in Action: Write a daily schedule						
			Composition: My daily life						
<p>* Please record any cultural or language activities or experiences that you completed outside of class that are helping you to work towards your goal.</p>									

J-Course : Language Courses

図5 日本語と文化の体験記録シート

このシートは基本的に『まるごと』の活動編との関連性を強く持たせている。具体的な内容は図5に示すとおり、シートの左側にはトピックと課、Can-do 目標を記載している。その右側にある「Task」の欄には、その学期中にPFにファイルすべき課題（3.4で後述する「Japanese in Action」）や宿題が記載してあり、その右隣にはその課題を提出したかどうかをチェックする欄を設けている。提出する課題や宿題はその課の授業で配布するが、提出の締切りはないので、受講生が本人の都合に合わせて、自分の学習を自己管理できるよう配慮している。

シートの右半分は、Can-doに合わせて自分の生活環境の中で自由に行った体験を記録するためのスペースになっている。受講生は学期中の体験をこのシートに記録していく。そして、何か体験に付随する物があればそれも日付と共に記録し、PFに収集する。体験についての気づきや発見をメモやコメントの形で記入する欄も設けている。

下の部分には、トピックやCan-doに直結しない活動も記録できるようにしている。また、3.2.2で先述した「学習目標と振り返りのシート」とも連携させ、受講生自身が立てた学期目標を学期を通して喚起し、その達成のために教室外の体験をするように、「自分の立てた目標を達成するために行った教室外の言語と文化に関する活動や体験を記録してください」との指示も記載した。

このシートは学期末の振り返りで行う話し合いの際にも活用するが、詳細は3.2.4に後述する。

3.2.4 タスクシート「Japanese in Action」

これは受講生の教室外の体験を促進するために2014年度に開発した教材である⁽⁴⁾。内容は『まるごと』活動編の特に「生活と文化」に関連させ、『まるごと』が提案する「知る→関心を持つ→行動する」(来嶋他 2014)の過程を受講生が体験できるように教材として具現化した。

各課にA4一枚で、構成は(1)授業内容の理解確認のためのタスクと(2)学んだことを受講生の学習環境に応じて自由に組み立てる応用タスクの2部構成としている。これらを具体的に図6に示した第8課のシートを例に見てみると、トピック8の「生活と文化」の内容に関連し、(1)には、上の1の語彙に関するタスクが該当する。(2)に該当するのは2と3のタスクである。2にあるように、タスクをするために「まるごと+(まるごとプラス)」や「エリンが挑戦!にほんごできます。」といった参照するウェブリソース⁽⁵⁾を指定している。授業内容に関連する動画の閲覧を積極的にタスクの一部に取り入れていることが特徴の一つである。

受講生は活動編の授業の後に宿題としてこのタスクシートに取り組み、教師に提出する。教師は返却の際にフィードバックをし、PFにファイルするように指示している。このフィードバックは受講生と教師間のコミュニケーションの機会としても機能を果たす。その他、2014年2学期には学期末の振り返りの時間に行う話し合いを活性化させるために新しい活用を試み、「生活と文化」に関連した内容を復習するタスクを設けた。意見が出しやすいように3名ほどの少人数グループで学期に学習したトピックの中から一つ選択し、そのトピックについて「生活と文化」から学んだ内容、その学びから得た感想、意見、そのトピックに関して教室の外で新たに知った情報の3項目について話し合い、図7のシートに記入していった。そして、話し合いのための材料として、前述の「日本語と文化の体験の記録シート」と一緒にこのタスクシートを使い、学習内容とPFの構成物を連携させ、受講生に体験について振り返らせた。受講

生がシートを見せ合いながら記述内容を共有し、特に「教室の外で新しく知った情報」を共有することで互いの「新しい発見や気づき」を促すことをねらいとした。そして、グループからクラス全体へと話し合いの輪を広げた。

図6 Japanese in Action (第8課の例)

図7 グループワーク用シート

3.2.5 学期を通して見る評価活動

以上見てきたように、Starter コースではPFの構成物を利用しながら、学期を通して様々な評価活動を定期的に行っている。図8は各評価活動を学期スケジュールの流れに当てはめたものである。

JFSYのStarterコースの受講生にとって、JFスタンダードはまだ馴染みのあるツールとは言い難い。そのため、まずコース開始時の1学期のオリエンでは、JFスタンダードの概要を紹介するところから始め、『まるごと』を使ったコースの特徴と共にPFの使用目的や構成、各構成物の記述方法について説明をする。そして、授業内容に入る前に学期の学習項目、Can-do目標を確認し、受講生は学期の目標を立てる。前述のとおり、このCan-do目標の確認と関連させてオリエンで目標設定の時間を作ったことは2014年度の新しい試みであった。

学期をとおして毎回の授業ではCan-doチェックリストを使用した達成度の自己評価を行い、隔週の授業の冒頭に言語知識を測るための小テストを実施している。学期中間の授業の最後に簡単な振り返りの時間を設け、それまでに記録した言語と文化に関する体験や、受講生が見つ

けた学習に役立つ学習ツールの情報をクラス内で共有する。これは教室外の体験やPF活用のリマインドを兼ねている。

学期末においては、総括評価として、言語活動と言語能力の両方を評価するためにパフォーマンス口頭テストと筆記テストを実施している。振り返りの時間にはオリエンの時の目標設定と同様、学期末の学習を振り返る自己評価でもCan-doチェックリストと振り返りシートを連携させて評価活動を行っている。さらに学期を通して収集した全ての記録、成果物を見ながら学習の振り返りを行い、クラスメートとの共有の話し合いを行う。その際、3.2.4で述べたように、記録シートやタスクシートなどのPFの構成物を活用することによって、学習した項目と関連付けて、話し合いが活性化するような仕掛けを作っている。

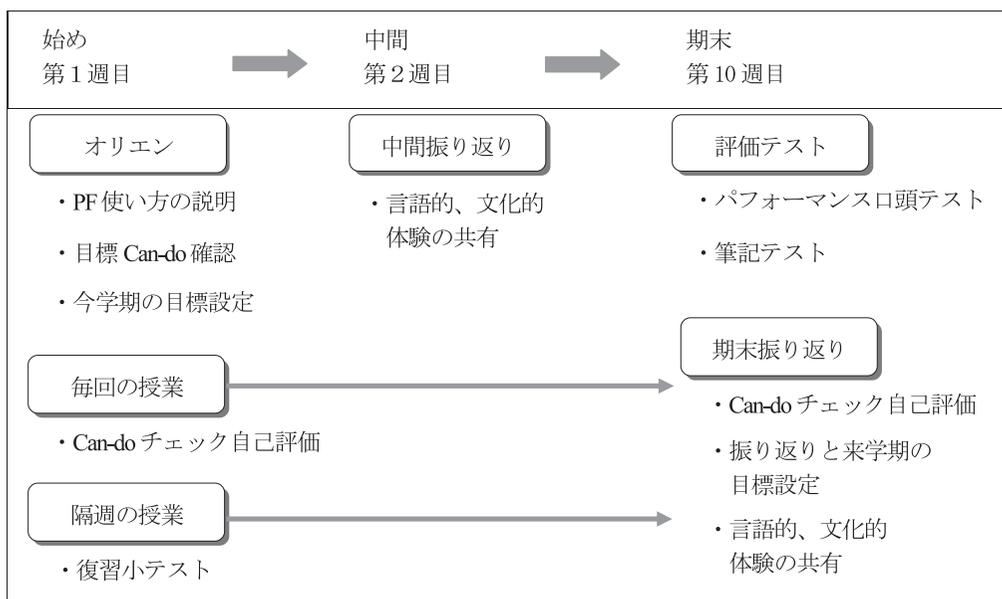


図8 学期の流れで見る評価活動

4. 成果

学期末に受講生が提出したPFの収集物と記述内容、受講生が記述したアンケートの回答をまとめたものを分析し、以下に成果を述べる。アンケートは、1学期末に「PF評価」について受講生29名から回収したものと、2学期開始時にタスクシート「Japanese in Action」について20名から回収したものの2種である。

4.1 ポートフォリオ評価

アンケートでは以下のような回答があった。「PFは語学学習に役に立つと思いますか」との質問には、29名中26名が「はい」、3名が「いいえ」と答えた。「PFを使いましたか」との質問には、29名中21名が「はい」、8名が「いいえ」と答えた。ほとんどが肯定的な回答だった。授業担当講師の観察からも受講生は概ね好意的に受け入れていた様子が報告されている。

4.2 教室外の学習

アンケートの結果を見ると「Japanese in Actionのいい点は何ですか」との質問の回答には、「Outside of class」という単語が多用されていた。「教室の外でも日本語を使ってみようというやる気を起こさせてくれる」「生活の中で日本に関係する物がたくさんあると気づかせてくれる」など、教室外の「体験」や新しい気づきや発見を促す機会になったことが窺える。また、「授業で勉強した内容を練習する機会となる」「良い復習の助けとなる」「実際の例を通して、クラスで習ったことをより理解させてくれる」との回答から、授業の内容理解や復習の機会となり、学習の助けとなっていると意義を感じているようであった。受講生もすでに授業で学習したことなので、あまり躊躇せずに日本語を使ってみようということ後押しになったのではないだろうか。「Japanese in Action」が教室と教室外の活動を有機的につなぐ役割を果たしていた。

また、学期末の振り返りの時間の話し合いのために、コース入学前にした体験の資料を持ってくる受講生もいた。そのために、事前に日本旅行の写真を整理して並べ替える、写真に説明を付けるなど、新たな学習が起こったことがわかる。旅行に行った時は気づかなかったが、新たな視点でそれを見直し、そこから生まれた疑問や関心のあることを教師やクラスメートに質問するなど、学習が促進されたことがわかる。話し合いでも体験の紹介だけにとどまらず、新たな気づきを共有でき、話し合いが活性化した。受講生が話し合いで紹介した体験は、『まるごと』のトピックに関連した内容だったので、クラス全体である程度の共通理解もあり、話し合いも活発であった。この話し合いの場で、受講生は自分の学習の過程を振り返り、学習の成果を評価する機会が得られただけでなく、他者の「学習の過程や成果」も見ることができ、そこから新たな気づきや刺激を受け、相乗効果でさらに教室外の学習や体験を促進する効果があったのではないかと考えられる。

4.3 目標設定と評価

「PFはどんな利点がありますか」とのアンケートの質問には、「ゴールや目標を設定できる」「初めにゴールを設定し、それを書くことによって、何ができるようになりたいかはっきりフォーカスすることができる」等の回答があった。2013年度に行った同じ質問紙による調査と比べて、「ゴール」と目標設定について言及している回答が目についた。前述のとおり、2013

年度は学期末に受講生にその学期の学習を振り返り、それを踏まえ、今後の学期の目標設定をさせていた。しかし、立てた目標の達成度を自己評価させる時間は設けていなかったため、目標を立てただけに留まってしまっていた。2014年度のコースから毎学期のコース開始日のオリエンで、各受講生がその学期の目標設定をし、学期末にその目標が達成できたかどうか自己評価する時間を新たに設けたが、それによって受講生に目標設定することの意義を感じさせることができたのではないだろうか。

また、「学習の計画と振り返りのシート」に記入する自己目標には、レベルに合った、具体的な記述が多くなったという成果が見られた。2013年度の目標は「日本人と話せるようになりたい」「日本映画がわかるようになりたい」など漠然としている記述が目についた。2014年度はひらがな、カタカナや漢字をマスターするという文字習得に関する目標や、抽象的な目標も依然として多いが、「日本食メニューの内容を理解して、そして、注文できるようにする」「日本人と会った時に、ちゃんとマナーを理解して、日本語で挨拶をする」など、Can-do チェックリストにある目標と似た文言で、学習項目に関連した具体的な目標を掲げる受講生が増えた。このことにより、受講生に自由に立てさせた目標であっても、結果的にコース目標のレベルに近づき、受講生が実現可能で、より達成感を感じやすいものになっていたのではないだろうか。また、目標を立てる際に、受講生は Can-do チェックリストをつぶさに見ることになり、コースの学習内容と目標を把握することができる。これは、教師と受講生が目標を共有でき、受講生は学習の責任の一端を担う効果も期待できる。

「自己評価は役に立ったか」との質問にも、29名中26名が「はい」、1名が「まあまあ」と答えた。「はい」と答えた人は「自分の学習した過程を振り返る機会を持つことは、どんなにたくさんのかを学習したのか気づかせてくれる大切なこと」「自分の学習した過程をわからせてくれる良い機会」「自分で何に集中して、もっと勉強しないといけないかわからせてくれる」等の回答があった。はじめは、自己評価について懐疑的であったり、意義を見出せなかったりする受講生もいたと思うが、コースが進むにつれて、教師からの指示がなくても活動後に Can-do チェックリストを出して、記入する受講生が増えてきた。教師による観察や学期末に回収した Can-do チェックリストの記述により、学習者の評価活動が習慣化していることがわかった。

このように、2014年度では継続して定期的に教室で評価の場を持ったことが、自己評価を習慣化させ、意義を感じる一助となったのではないだろうか。また、PFを使用した評価は特に学習者自身の学習の過程を可視化することができる点で有効的であると考えられる。数値などでは測りにくい多面的な成人学習者の学習の成果を評価する良い手段であると期待できる。

4.4 記録・保存

4.3と同様の「PFはどんな利点がありますか」との質問に、「学習の過程を見ることができる」と半分以上の人が回答していた。2013年度も同様の回答が多かった。しかし、その理由を「いろいろな資料を一つにまとめることにより、学習の過程を見ることができる」と、管理のしやすさに言及している回答が多いことが特徴的であった。「興味深い日本文化体験をした記録を残しやすい」、「テーマなどの関連性によって、いろいろな情報をまとめることができる」などの回答もあった。2013年度に提出されたPFを見ると、学習者はファイルすべき物を選別せずに自分の興味に従って集めた日本文化に関する物などをすべて収集してしまっているケースも数多く見られた。より「生活と文化」や教科書のトピックにあった物を収集するようになった。受講生も収集する物の選択基準ができ、ファイルを管理しやすくなったのではないだろうか。

2013年度は体験の記録について時系列に記述することしか指示は出していなかったので、「日本人の友達と話す」など、同様の活動が続くと、記録に残さなくなる傾向が見受けられた。しかし、2014年度は「日本語と日本文化体験の記録シート」に「日本人の友達と「家族」について話した」など『まるごと』のトピックに関連した具体的な記述が増え、同じような活動を体験した場合でも何について話したかまで記録するようになった。「日本語と日本文化体験の記録シート」に教室内と教室外の学習や、学習の過程を一枚のシートに記録することによって、学習の全体像が可視化でき、自分の学習を把握することに役立てられるのではないかと期待できる。

5. まとめと今後の課題

PF評価は学習者の自律的な学習、特に教室外の活動を促し、学習の自己管理を促す役割を果たしていた。PFの各構成物、そしてPF評価活動と教室活動を有機的に結びつけたコースデザインをすることが必要であり、それが、学習者の評価活動の積極的な参加を促し、成人学習者の学習意欲と学習行動の促進の一助となることが示唆された。

PF評価により、教師主導の評価や、筆記試験などの数値的評価だけではない、評価の機会（数、種類）が増えた。このような幅広い評価は、特に多様な背景、学習動機を持つ成人学習者の学習の過程を評価することを可能とし、動機づけの点からも効果的なのではないかと考えられる。また、教師は学習者の教室外の学習行動、学習環境、学習意識なども可視化でき、学習者を把握することに役立てることができる。

オリエンで受講生にPF評価活動の経験の有無を尋ねたところ、大多数の受講生が「ない」と答えた。PF評価に消極的な受講生も、なにか強い理由があって参加しないのではなく、面倒くさそう、勉強には関係ないなど漠然とした先入観を持っているだけのように感じた。そのため、まずは、PF評価の参加を促すことが必要であると考えられる。しかし、ある期間継続しな

いと教師も受講生も効果を実感できないと考えられるため、特に教室外の学習があまり期待できない成人学習者には、本人の主体性を尊重しながらも、教室内の活動として定期的な評価の場を作る必要性を感じた。

本実践においてPF評価が受講生に好意的に受け止められた要因として、入門コースを対象にしたことが挙げられる。受講生は日本語を学習し始めたところなので、その昂揚感もPF評価の参加を大きく促していたと考えられる。また、振り返りの時間の持ち方やPFの構成物については、その時のクラスの学習者に合わせて柔軟に対応していくことが必要であるとする。今後も引き続き、受講生の学習歴やレベルにあったPF評価の在り方、構成物の検討、サポートの仕方を検討していく必要があると考える。

謝辞：チームの一員としてポートフォリオ評価の教材開発、実施に尽力してくれた Katie Froggatt 氏、そして Brendan Yanada 氏にこの場を借りて、心から感謝を申し上げます。

〔注〕

- ^①『まるごと』の詳細については、来嶋他（2012）を参照のこと。
- ^②③と④はJF提供の教師サポートキットの「成果物一覧（例）」を、⑤は「文化体験一覧表（例）」を参考に作成した。
- ^③2学期の受講生42名のうち、29名が1学期からの継続者であった。残り13名は2学期からレベルチェックを受けて入った新規参加者であった。
- ^④このタスクシート「Japanese in Action」についての詳細は西山（2014）を参照のこと。
- ^⑤国際交流基金「まるごと+（まるごとプラス）」<<https://marugotoweb.jp/>>
国際交流基金「エリンが挑戦！にほんごできます。」<<http://www.erin.ne.jp/>>

サイトはいずれも2014年5月1日参照

〔参考文献〕

- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美（2012）「JF日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』第8号、103-117、国際交流基金
- （2014）「『まるごと 日本のことばと文化』における海外の日本語教育のための試み」『国際交流基金日本語教育紀要』第10号、115-129、国際交流基金
- 国際交流基金（2009）『JF日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金
- （2010）『JF日本語教育スタンダード2010利用者ガイドブック』国際交流基金
- 西山恵子（2014）「ポートフォリオ活用実践例－教室の内と外をつなぐタスクシートの試み－」『JF日本語教育スタンダード 準拠コース事例集2014－JF講座における実践－』、149-159、国際交流基金
- 松井玲子・西山恵子（2014）「学習の自己管理を促すポートフォリオ評価－シドニー JF 講座における実践の報告」、第11回日本語教育国際研究大会（シドニー工科大学）、「JF日本語教育スタンダード」に準拠したシリーズ教材の開発と実践」パネル発表